

## [21]文學研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2557008>

---

出版情報：文學研究. 21, 1937-12-25. 九州文學會  
バージョン：  
権利関係：



## 雜 錄

### 三田文學九月號 現代英吉利文學特輯

三田文學が現代英吉利文學特輯號を出した。英文學特輯は始めてあるらしい。これから毎年九月號をそれに宛てる由。

三田文學は異色ある文藝雜誌として兎も角もジャーナリズムの一角にあるのだが、それが英文學を特輯として取り上げたといふことは大いに注目していゝ現象だと思ふ。今までの日本に於ける英文學は日本ジャーナリズムと關係が薄いといふことを特色にする。外國文學がジャーナリズムの上で問題にされるのは現代の外國文學が主であるのはジャーナリズムといふものゝ性質上當然であるが、その中で現代のフランス文學が著るしく目立つのは日本の佛文學者のその方面での精進によるものであらう。それに比してイギリスの文學はたとへ伊藤整によつてジョイスが日本のものになつたとか、同じ彼がローレンスの翻譯を出して名を賣つたといふやうな事はあるにせよそれも全く末梢的なものでしかなかつた。結局現代のイギリス文學すら、いくらか少數の例外はあるにしても全体として見て學者たちの間だけの獨占物になつてゐるといふのが割になしの現狀といつてよからう。

かういふ狀態は一代學者たちの不見識によるものか、日本の民衆が悪いのか、それともその仲介をなすジャーナリズムが責を負ふべきであるか、それについては今は言はない。たゞかういふ狀態は面白くない狀態だといふことは確信して言へる。

それは第一に、進歩的な日本の文學大衆にとつて考へなければならぬ問題は現在の英文學の中に數多くある。例へば「政治と文學」といつたやうなことだ。世界文學の水準からいつて現在の英國は立ち遅れの感があるとは耳にすることだがこれは實際を知らぬ迷言であると思はれない。またシェークスピアなどどうしたつて世界文學の中の大きな存在だ。それなのに、それら大衆と英文學とが分離してゐることは、大衆自身にとつて好ましい環境ではない。

第二に英文學者の側について言へば、學問がそれだけで獨立するといふことは面白くない。何となれば、さういふ場合その學問はデカタンに陥り極めて不活潑になる恐れが充分にある。たとへばそれは膨大な形而上學が一篇の抒情詩に過ぎないやうなものである。

この二つの點からジャーナリズムを通じてのイギリス文學の大衆化といふことは眞面目に考へなくてははいけない。それは單に學者の側から大衆を啓蒙するといふ一方的な問題だけではないのである。

尙この際現代文學に對する偏見について一言しよう。それは現代の文學は、必然性のないものだから現代が過ぎれば消え失せて

しまふ性質のものである、そんなつまらぬものを讀むより、讀み甲斐がいつもあつて安全な定評ある古典に親しむのが遙かにましだといふのである。今時そんなと思ふ人があるかも知れないがこれは事實なのである。しかしこれは間違つてゐるので、くどいやうだがその理由を書くと、我々の行爲・實踐は現在に於て行はれる外はないといふ意味であらゆる歴史的機縁のうち現代・現在は優越的な意味を持つてゐるといふことだ。傳統すらそれが現代に生き得る限りで傳統なので、古典といふこともさういふ風に考へないとナンセンスになる。つまり古典そのものにも辯証法的展開があるとしなければならぬ。現代の文學は低級であるかも知れない(私はさう思はないが)、たとへ低級であるとした所で、それに對する責任はそれが現代のものであるといふ理由で我々自身にも掛つて來るのだ。私がかういふ現代文學無用論者に對して忠告したいことは、古典と同様に、若くば古典以上に我々の同時代人の作品を讀み、批判することである。その上古典ばかり讀んでゐて古典を理解してゐると思ひこむといふことすらが誤まつてゐる。その理由は既に書いた。

今まで述べて來たことは、三田文學が現代英吉利文學を轉轄としてとり上げたことの言はゞ外面的な意義づけである。アカデミイとジャーナリズムとの交渉といふ面と現代の英文學の我々に對する意味といふ面とから。で實物の點檢に移るべき時になつた。

かういふ可成り野心的な特輯號には、何らか指導的な卷頭論文なもの、非常に視野を廣くつた論文が欲しい氣がどうしてもする。月並な雜誌の常套手段を追へといふのでは勿論ない。卷頭の西脇順三郎(以下皆敬稱を省く)「現代文學回顧」は今までの西脇ものと變つたところもなく難談調のくだけたもので反つて若い人の讀論調のもの、空虚なものに比して充實した味があるが、この人のものには迫力といふものがなく指導的といふところからは少し遠い感がある。

「一九二〇年代」(福原麟太郎)は率直に自分が現在の英文學に對しては現役でないことを述べたもので正直な點が非常にいいが、注目すべき中堅英文學者の一人がさうであることは寂しい。

成田成壽の「劍橋の三批評家」はリチャーズ、リーウイス、ルーカスを紹介したもの、名原廣三郎の「オールダス・ハックスリ」はハックスリの思想傾向のアウトラインを引いてゐるが、二つとも論旨がはつきりせず讀みづらい。これはリード論の岡橋祐にも言へることだ。英文學についての難然たる知識を求めてゐるのではなくて英文學に對する正しい見方が示されて欲しい。

「現代知性とドライデンの場合」(杉本喬)はヒューマニズムの見地からドライサーのソヴエト觀を主に見たもの。北村常夫はスペイン戦争で戦死したフォックスの生涯と業績を簡潔かつ適確に述べて要領を得てゐる。上田保と吉武好孝のルイス論は「文學と政治」の點で興味深い。龍口直太郎「フランシス・ステュアート」岩崎良三「デモン・コリア」は寧ろ讀物風とも言ふべきか。また

作家論の翻譯として村山英太郎「ヒューム論」(ロバーツ)、阿比留信「リアリストとしてのイエイツ」(スペンダー)がある。

光つてゐるのは中野好夫の「英國現代劇が暗示する一問題」で四頁の短いものだが主張をもつてゐるといふ點が他の大多數のものとはつきり違ふ。民衆の間に生れ作家はたゞ代辯するだけの叙事文學的なものさういふ戯曲の要望は現今積極性をもつた性質のものだと思ふ(この點については工藤好美が世界文學講座の中で論じてゐる)。荒川龍彦「最近のハックスリとその周囲」はハックスリの平和主義への轉向問題をめぐつて興味深い。その中で書いてあるところによると英國ではこのハックスリの平和主義は評判がよくないらしい。左翼批評家は勿論のこと、人民戰線的な作家、またエリオットは以上とは別な觀點から非難してゐるらしい。荒川氏も「彼こそは所詮、平和主義によつて宗教に通じようとする、自由主義的理想主義の堅壘に立籠る知性人である」といつてゐるのはハックスリに鑒成してゐるのではないやうである。「文學」十一月號に中野好夫が同じ問題について「だが何がハックスレーに、あの明敏な知性の持主であり、自からそれを恃むかに見えたハックスレーにこの痴人の夢を夢みさせるのであらうか。彼の提案がいかん迂遠なものであるかを彼自身に氣がつかない」は考へられない。しかもなほかつこれを提案せざるを得ない彼の心事には悲痛なものが感じられる。……神祕家イエイツが豫言者になることはまだ驚くに當らないが、ハックスレーが豫言者になることは、ハックスレーがトルストイになることはひどくいたりたし感じがする。」

と言つてゐるのは穩健な所だらうが、私としてはハックスリが知性を追求した寫局知性の否定にまで行かざるを得ず思ひ切つて(知性的に思ひ切つて)行つた點に彼としての一步前進が認められてよいのだと確信する。尚、町野靜雄が「新實在論と現代英文學」の中でハックスリなども常識哲學なのだとして述べてゐるのは星風として面白いと思ふ。併し兎も角も荒川龍彦のハックスリ論は分量も相當にあり、見方、態度に於て三田文學九月號の白眉である。菅原卓「英國演劇の展望」は少しどた／＼した感じ。「パーベリヨンの日記」(西川正身)、「ストレイチの傳記文學」(阿久見謙)の二つは氣持よく讀めるもの、文章の平明さでは前のものがよい。永松定の「ロレンス文學論」は正當なことを言つてゐるがも少し曲が欲しいと思つた。

この他翻譯小説のいくらかや基長老の「マンスフィールドとマリイの結婚するまで」(これは文章の下手なのが特色)、北詰榮太郎の「新しい詩の擁護」その他澤山のものがあるがとりたてゝは述べない。

編輯方針について言ふと、盛り澤山で讀者を徒らに迷はせるのは方針がはつきり立つてゐなかつた所爲ではないかと思ふ。私の希望としては三つか四つ相當の指導的な大きいもの(その中には文學の方法についてと言つたい、意味の哲學的な論文もあつて欲しい)を載せて欲しかつた。それ以上細かいことは言はない。また、作家論にT・S・エリオットの名前が洩れてゐるのは私とし

ては不思議千萬であるが、新進氣鋭の人たちがエリオットなど過去の人だときめつけたからでもあるのだらうか。

一体に若い人たちの論文は平明さを缺いて、論の對象に引きずられ勝に見えた。さうであることはアカデミクによくない許りかジアナリステイクにも大衆性をなくする原因になると思ふ。また三田文學であり乍ら三田出身の人たちが餘り目立たないのは編輯者の心ある寛容のためであらうか。

しかし何はともあれ、この特輯號は色々な意味で注目すべく、批判と理解に値するものがあり、その方面で竿頭一尺を進めたものであることに變りはない。(十一月二日森岡助手)

### アカデミイ・フランセエズの授賞

アカデミイ・フランセエズは、さる七月九日、例年のとほり數々の大賞を授與した。

大文學賞(10,000 Fr.)は、かねてから期待されてゐたごとく、モリス・ヤグル氏 M. Maurice Maeterlinck に與へられた。その著作のすべてにむくいるためである。詩人であり、小説家であり、劇作家であり、また神秘學者でもあるこの「人々の歌」*La chanson des Hummes*の作者は、實に文學のため生活の一切をささげてきたのである。そして、かういふ多岐な活動の領野において同氏のおさめた成果はかなりめざましいものであるけれど、このたびの

授賞、また、妥當をかくものではない。

プリユウ賞(30,000 Fr.)は、ガブリエル・マルセル氏 M. Gabriel Marcel に、その劇作「投槍」*Le Dard*を賞して與へられた。この賞は劇作家 Eugène Brieux (1858-1913)を記念することとして、もつぱら戯曲のよきものにあてられてゐる。マルセル氏は *L'Éternité*, *J. Prevost*, *J. Paulhan* などとともに「新フランス誌」に據り、哲學的教養の多様な姿態をみせて、いはゆる「エヌ・エル・エフの批評學」をなしてきた。純粹詩の論争のをりにもみられたごとく、戦後、批評のうへに哲學を氾濫させたかの理性と直觀の相剋を、内心から位置させようとしたのがかれらである。いま、そのうちのマルセル氏がとくに劇作について授賞されたことは、あるひは、かれを見直させる一つの機會となるかもしれない。

小説賞(5,000 Fr.)は、小説「奇蹟の漁」*La Pêche miraculeuse*のため、ギイ・ドゥ・ブールタレス氏 M. Guy de Pourtales のものとなつた。ブールタレス氏はロマン瑞西、ウオオ・ヴァンの人である。これまでにも、「淡水を好む人々」*Marius d'eau douce*、「モンクラアル」*Monclar*、「リスト」*Liste*、などの作がある。もはや、この賞をえて文學者ブールタレスはゆるぎなきものとなつたのである。

このころ、アカデミイの内と外とをとはずおびただしい授賞の行事があつたけれど、ここにその半ばをあげる邊もない。それはそれとして、こころみに「奇蹟の漁」についてすこし記したい。

# 「奇蹟の漁」 すなごり

——この大ざっぱな小説で、と作者は「奇蹟の漁」のことを語る、私はロマン瑞西の叙事詩をつくらうとした。それには三つのモチフをもつてゐた。戦前の晴朗にして幸福な、そして萬事が容易におもはれた時代、戦争の大動搖、新しい天と新しい地をいくわれわれの時代、この三つを敘さうといふのである。

この小説の框として選ばれたのは、もちろん、ロマン瑞西である。だが、たださうなのではない。

——といふのは、人はおのれの愛するものでなければよく描けないからである。この土地の私はこどもである。それに、われわれの作家たちは、アミエルからドゥ・トラスにいたるまで——ラミューズは別として——むしろ心理の分析と解剖とをこととし、かかる實驗はかれらの手づけなかつたところである。私はこれをなした。けれども、人々は、いま、私の作の湖水を描いた場面やエピソードに拘執したがる。それは私の狙つたものとは遠い。ほんのお添へもののなのだ。

ブルタレス氏はここで不満の表情をする。新しい天と地とのために生きる作家のはらだたしさである。

——私ハみたりの主人公たち、ボオル、ルイズそしてアントアネットは、ジュネエウの框からもロマン瑞西のそれからもはみ出してゐるはずである。かれらは『存在』<sup>エントル</sup>にながるものなのだ。世界の大擾亂を前にしてかれらのなした反動は、一つの民族のみならず一つの世代のそれなのである。

かくして小さな圖書よりも大きな壁畫をとるといふ作家の「奇蹟の漁」を、いま、われわれはもつのである。

作中のボオル・ドゥ・ヴィラルはブルタレス氏その人である。人みながおのれのうちにもつ可能性と蓋然性とをになふ作者じしである。狂ほしく音楽家ボオルは薄倖のルイズを愛する。ルイズは勤行の女の典型である。どんな本能をももちあはさない。自然に發露するなものもなく、既存の、實は謎のやうな法典にしたがつて行ふばかりである。實のところ、すべてを魂の地所にのみおしこめようとする欲望は、生活を愛せずこれに祕かな怖れをいだく人たちの病疾である。魂は、霊的なものはともかく、いろいろな出来事からはなれてをれる。けれども、ここで問題なのは宗教でもなければ神祕主義でもない。戀愛なのである。アントアネットはボオルを愛しながら、富める結婚をしひる家族のものに身を供へる。抛棄のころみはつねに征服のそれより易い。征服は日の出るたびにやりはじめるがよい。抛棄は一生に一度きり宣言すればたりののである。ルイズにそむかれ、アントアネットにさられ、人生になんのあてもなくボオルは殘酷なまでに劇の返打をうける。うけながらかれのしばしば想うたもの、それはジュネエウなる博物館のコンラッド・ヴィット作「奇蹟の漁」の繪である。『懺悔』<sup>ちんかい</sup>な、なんぢ今より後、人を漁らん。崇高なことばである。人間を漁るもの、魂を漁るもの！たえて久しくボオルのひもどかなかつた聖書である。（新約聖書、ルカ傳、第五章）

しかし、われわれは、はやまつて、ブルタレス氏を精神主義の

祠に迫ひこんではならない。すばらしいこの小説のなかには多くのものがある。ある意味では多きにすぎるのである。新しい世界のための良き意圖についてはすでにふれた。そのほか、すくなくもこれだけは拾へると思ふ。ほとんど正常な人間生活の流れ。スイス人の性格の精細な研究。戦争の期間およびその前後におけるヨーロッパとスイスの圖繪。一つの個性をとほしてみられた戦争と平和の歴史。プロテスタンチズムとその發展に關するすばやく興味ある觀察。最後に、二つの愛に裂かれる男をのべた感情のエピソードである。このエピソードについては、ドストエフスキの「白痴」、フロオベールの「フレデリック・モロオ」、そしてヤコブセンの「ニイルス・リイネ」を想はせるものがあるといはれてゐる。(ヌウヴェル・リテレル紙による。永田副手)

### 一九三七年度の獨逸文學賞

一九三七年度のドイツ文學賞の中で、獨逸國民文學賞、國民圖書賞及びゲーテ賞の受賞者が夫々決定してゐるが、これについて簡単に紹介しよう。

「獨逸國民文學賞」——これは、海外在住ドイツ人の提供にかゝるものであるが、毎年、シルレルの命日にあたる五月九日に、シュトゥットガルト市から授與されることになつてゐる。本年度においては、ドイツ海外研究所長にして、シュトゥットガルト市長の、シュトレリン博士によつて、ジイベンビルゲン生れで、現在ミュンヘ

ン在住の、ハインリッヒ・チリッヒ (Heinrich Zillich) の小説「國境と時代との間」(Zwischen Grenzen und Zeiten) に對して授與された。

現今、ドイツ文壇の中堅をなす人々は、シュラーフやシェーフエル、シュトラウス、シュテール等を除けば、大抵四十歳から六十歳までの人々、即ち、本年度のゲーテ賞の受賞者たる、コルベンハイエル初め、ビインディング、ヨースト、グリーゼ、グリム、カロッサ、アルンク、ベルトラーム、シュナツク、ボンテン、ザイデル等であるが、チリッヒは丁度本年四十歳で、中堅層では、最年少である。これ等の人々は皆、大戦の生々しい體驗を持ち、しかも敗戦に屈せず、却つて意氣天を奮く復興の精神を以つて、現ナチス進展の思想的原動力をなしてゐる人々であるが、この人々は主として、植民地問題や國境問題、時局問題を取扱つてゐる作家と、過去の歴史の中に、永遠のドイツ人を求めてゐる作家とに大別出来ると思ふが、チリッヒは前者に、コルベンハイエルは後者に屬するものと思はれる。チリッヒの「國境と時代との間」は、國民文學賞の他に、やはり本年度の、ベルリン文學賞の第一席をも獲得したもので、東方へ伸びんとするドイツ人の困難や、國外在住ドイツ人の分布状態や業績等を描いたものである。チリッヒの故郷、ジイベンビルゲンは、大戦前までは、境太利の一州であつたが、今はルーマニア領となつてゐる。大戦の際は、境太利人として、これに参加し現在、雑誌「クリングソール」(Klingsoor)を發行して活動してゐる。ベルリン、ローマ編輯が、バルカン半

島の、ルーマニヤ、ユーゴスラビヤから、更にトルコへと東方への延長の氣運を示してゐる際、チリッヒのこの「國境と時代との間」のもつ意義も亦大なるものがあると思はれる。因に、ベルリン文學賞の第二席は、ヨハンネス・リンク（Johannes Link）の詩「樹」（Der Baum）、同第三席は、カール・フォン・ブレーメン（Carl von Bremen）の「船人の搖籃」（Die S. hifewiege）であつた。

「國民圖書賞」——この圖書賞の受賞者は、フリードリヒ・ベトゲ（Friedrich Bethge）と決定したが、これはベトゲの劇「老兵の進軍」（March der Veteranen）に對して、宣傳相文化局長總裁、ゲッベルス博士によつて授與されたもので、同博士は授賞に當つて「ベトゲは、現ナチスの老兵團に屬し、ナチスの國粹運動の達成に與つて力があつた。大戰に参加して四度も、名譽の戰傷を負ひ、また「老兵の進軍」は、ドイツ國民の、國民的名譽の概念をハッキリと現はしたものであり、傳統を誇る、プロイセンの軍紀と軍人の服従との調高き歌である」と稱讃の辭を述べてゐる。ベトゲは已に物故した、ゲルマニスト、リヒアルト・ベトゲの息子で、母方は、東部プロイセンで、二百五十年もつゝいた牧師の家の出であつた。ベトゲは、一九一四年八月、志願兵として、陸軍部隊に入隊、一九一六年中尉に、その翌年中隊長に昇進してゐる。大戰後是一時、ベルリン市の吏員となつたが、今日では、フランクフルト・アム・マインの宮廷劇場の監督及び脚本主任の地位にあつて活動をつゞけてゐる。

「ゲーテ賞」——一九三七年度の、ゲーテ賞の受賞者は、ブタ

ベスト生れで、現在ミュンヘン近くの、ゾルレンに居住してゐる、コルベンハイエル（Ewin Guido Kolbheyer）と決定された。ゲーテ賞はその規定によると、フランクフルトの、ゲーテ賞授與委員會の決定によつて、毎年、ゲーテの誕生日たる、八月二十八日に、フランクフルトの「ゲーテ誕生の家」で授與されることになつてゐる。

現今、ナチスは、社會的にも、政治的にも、文化的にも理想の新獨逸建設に向つて邁進してゐるが、文學にあつても、純粹なドイツ的傳統への復歸を強調してゐる。フランクフルトのゲーテ賞授與委員會が、コルベンハイエルを受賞者と決定した理由も、この點からして、略々伺はれるのであるが、コルベンハイエルが、その哲學的、又は文學的作品に於て常に獨逸に對する責任を自覺し、忠實に獨逸の本質的なもの、純粹性と再現に、孜孜として努力し、獨逸の民族的發展のために大なる貢獻をなしてつゞけて來た、といふ點を認められたものである。事實、コルベンハイエルの作品を見ると、文學的なものにしても、哲學的なものにしても、常に「Volk」（民族）なるテーマに關係づけられるものが多いが、これは、農民生活とか、田園を背景にした素朴な通俗的な意味に於ていふのではない。コルベンハイエルは、常に自らを樂しみ得て、しかも獨自の立場を固守し、現代ドイツの精神文化を代表してゐる人々の中にあつても、もつとも我執的な、もつとも活動的な人物の一人だとされてゐるが、彼は、單なる詩人とも呼べないし、また單なる哲學者ともつかない。彼の望むところは、同時にこの

彙 報

兩者たらんことである。この意味で、「見聞者」とか「豫言者」とか呼んだら彼に一番よく當はまるだらう。

コルベンハイエルの作品、例へば、處女作「ジオルダアノー・アルノー」——これは後で、「英雄的熱情」と改題された——

や、スピノーザの自覺經路を描いた小説「神の愛」及び三部から成る長篇小説、「バラツエルスス」や「グレゴールとハインリッヒ」等の中心をなしてゐるものは、アルノーやバラツエルスス、スピノーザやグレゴール、ハインリッヒ等で、これ等の人々はいづれも、十六世紀、十七世紀の代表的人物であるが、コンベンハイエルは、かゝる一時代の代表人物を楯にとつて、自己主張をして來たのではなく、歴史の經過の中にあつて、自己の役割を演じ、その悲劇的な運命を描き出してゐるこれ等の大人物に於て、彼が看取したものは、人間的な出來事以上のものであつた。即ち彼はその作品の主人公を常にイデーの代表者、また形而上學的な原理の實行者と觀てゐる。元來、彼の思维的根柢をなしてゐるものは、その生物學的研究の基礎の上に立つ、生物的有機的なものとされてゐるが、この點から彼は、自我主張をなす觀念論を排し、觀念や自覺や反省は、生物的有機的なもの、從屬的機能となし、文化を自然的な生の法則によつて説明せんと努めてゐる。かゝる見地から彼は、獨逸の過去における世界觀的な諸要素を、現代獨逸の感情と體験にまで引き戻すことを自己の使命として努力しつゝ來たものである。とまれ、コルベンハイエルが、現代ドイツの文化進展の上に、不可缺の一要素をなしてゐることは、ゲーテ賞の授與が雄辯にこれを物語つてゐる (Die Neue Literaturに據る。松本副手)

九州帝國大學法文學部文學關係學科卒業論文題目

(昭和十二年十月)

英 文 學

「テムベスト」研究

高 原 榮

佛 文 學

ミユッセの生活と藝術に就て

石 進

九州帝國大學法文學部文學關係學題目(昭和十二年第二學期)

國 語 學

講義 國語學概論

春日 教授

國 文 學

講義 平安朝文學史概論

同

演習 學本枕草子

同

講義 中世後期文學思想

小 島 助 教授

演習 近松淨瑠璃

同

演習 芭蕉連句(猿蓑)

同